

「あだ名の是非」

公教育における校則の見直しが進みつつある。理不尽な校則が時代の流れに則することなく引き継がれてきたことを反省し、生徒たちの快適な学校生活の実現に向けて、大人たち(教職員)が見直しへ確かに動き始めたと思っていた。

ところが、小学校では「あだ名禁止」の取り組みが増えているという。あだ名では呼び合うことなく「〇〇さん」と呼び合うことを勧めている。校則に「あだ名禁止」を明確に位置付けている学校もあり、すでに6年間も取り組んできた学校の校長は、「小さいころから、人を『さん』付けて呼び合うことは、相手への尊厳につながり、相手を攻撃しない姿勢が育ちつつある」と言っている。本当だろうか？ なんだか国旗の日の丸を大切に扱えば、愛国心が育つといったレベルの論理と同じように思える。

「あだ名禁止」は、いじめ防止策であるらしい。確かに身体的特徴を揶揄するあだ名でいじめられ不登校になったという相談も私の相談室でも多々ある。しかし、禁止すべきはあだ名文化そのものではなく、呼ばれて生徒が不快感を感じるようなあだ名そのものを禁止すればいい。あだ名は人を傷つけいじめを誘発する可能性があるから禁止と言うなら、車は人を殺傷する可能性が大きいから車社会を否定すると言うのだろうか？

いじめ問題は、集団がある限りなくなることはないだろう。その解決は何よりも早期発見といじめた側にも教師や大人が寄り添えるかという問題だ。「日常的に幸せの実感がなく、自分を守ってくれる大人がいない」生徒が誰かをいじめ始める。教師が道徳的にどんなに訴えても、いじめゼロは単なる目標として終わる。この根本的なところを見誤ると、「いじめはあってはならない、そして自分の学校では絶対にあってはならないと考える校長が生徒の管理に走り始める」と私の友人の校長経験者が語っていた。

豊翔高等学院ではあだ名(ニックネーム)で呼び合っている。もちろん、本人の了解も得ているし、万一不快と感じたらそれを伝えてくれる土壌もある。あだ名は明るさと楽しさの雰囲気と共存する。ひとつの枠に収めようとする教条主義的な考えは豊翔高等学院にはない。

(丹羽 豊)